

---

# 新 あの空の向こうへ

大上 青

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

新 あの花の向こうへ

### 【Nコード】

N 8 7 3 0 U

### 【作者名】

大上 青

### 【あらすじ】

傭兵団アルトに所属する若きパイロット デュマ。

腕はそこそこ負けん気だけは人一倍。

だいてんのくに

しかし彼の前に立ちはだかるのは大天の国と空戦の神と称される神電しんでん果たして彼と仲間の進む道には何が待ち受けているのか

空と友情と淡い恋愛の物語

## 第一話（前書き）

こんばんわ

はじめましての人ははじめまして

以前から知っている方はお久しぶりです

ちょっと思うところがあって書き直すことにしました。

## 第一話

「ちっ」

蒸し暑い機体の中でデュマ・アウリオンは唸っていた。戦闘に入ってからはや二時間。すでに愛機は燃料が尽きかけていた。

「やばいな。このままだと墜とされる前に燃料切れで海にぼしゃんだ。」

そう考えたデュマは、周囲を確認しながら機体を翻した。ひるがえ幸い周囲に敵はおらず、なんなく戦闘空域を抜け出した。

「ふうっ」

デュマは安堵のため息をついた。しかしまだ問題が残っている。

「燃料・・・基地まで持つかな？」

デュマの所属する空戦傭兵団「アルト」の基地まで残り200キロ余り。しかし燃料はすでにレッドゾーンに達していた。このままいくと本当に海の藻屑だ。

「やばい・・・まじでやばい。」

早くも走馬灯が頭の中を駆け巡る。

「俺の人生短かったな・・・でも楽しかったな・・・って待て待て。まだ死にたくねえ!？」

デュマは叫びながら、無線機へと手を伸ばす。コール先は、基地。「こちら、デュマ、団長応答願います。」

少々遠慮がちに声を掛ける。するとすぐに野太い男の声が返ってきた。

「馬鹿やろう!!!!今どこで何やってやがる!!!!」

雷が落ちたのかと思うくらいの怒声が響き渡る。デュマは思わず身震いをしてしまう。

「すいません。ちょっと長い間戦ってました。」

「ったく、いつもはすぐ行つてすぐ帰ってくるくせに。」

そういわれてデュマは苦笑する。

「ほんとすいませんでした。」

「まあ、いい。続きは後からだ。早く帰って来い。」

団長にそう言われてはつと今の現状を思い出す。

「それがですね・・・」

デユマは今の現状を説明した。瞬間、無線が切れた。

「・・・へ？・・・マジ！？無線切れた？切られた？」

慌てて基地へコールする。が、何度してもつながらない。

「放置ですか？放置なんですか！！！！」

デユマは絶望したように叫ぶ。

「死にたくないし！！！！」

そんなことを叫んでいると、不意に無線が入った。

「ようつ、相棒！！元気かな？」

無線の主は傭兵団の仲間のバークだった。

「バーク！！来てくれたのか！！？」

「おうよう。怖い団長さんが馬鹿を迎えに行って来いって言うからさ」

「そうか、すまん。迷惑を掛けた。」

「いいてつことさね。次に俺が困ったときに助けてくれよ。」

「ああ、任せろよ。」

そういつてバークはデユマの方に飛行機を寄せ、手招きをする。

デユマはそれに従い、風防を開けて、バークの機体へと飛び移り、後部座席へと滑り込む。

「ああ。焦った。焦った。」

「焦ったのはこつちだつ！普通は飛び移らんぞ。」

デユマは首を傾げてバークに問う。

「へ？だつてお前手招きしたじゃん。」

「お前なあ。俺が離れたら落ちてたんだぞ？せめて落下傘ぐらい開いてからにしろよ。」

「あはは。悪い悪い。次からは気をつけるよ。」

「次あんのかよ！！」

バークは律儀にデユマに突っ込んだ。

「冗談だよ。」

デユマはあっけらかんとして言うと、それを無視してバークは思  
い出したように言った。

「団長が切れてたぞ・・・」

「・・・」

## 第一話（後書き）

1 話に特に変更はありません

## 第二話

なんとか基地に着いたデユマとバーク。

そこで待っていたのは、団長からデユマへの熱く愛の溢れる罰則と説教だった。

「この馬鹿やろうが!! どんだけ心配かけりや気が済むんだ、てめえは!!!」

「すいませんでした・・・」

デユマは必死に謝った。仕事中のミスでみんなに迷惑を掛けたのは痛いほど分っていた。

「ったく、お前は・・・。いいか? 今日から一週間トイレ掃除。それと今日の晩飯抜き、もうひとつは、お前が今日乗り捨てた戦闘機の分だけ減給だ。いいな?」

「はい・・・」

「おっと、もうひとつあった。」

「まだ!? まだあのかよ!!!」

デユマは思わずツツコンでしまう。団長はデユマをにらみつけて一言。

「何か言ったか?」

「いえ!! 何も言ってません。」

「・・・団員達に謝つとけ特にソニアにな。心配掛けたんだから。」

「はっ!!!」

そういつて団長は自分の部屋へと戻っていった。

デユマも踵を返し、いつもの仲間がたむろっている場所へ向かった。

「はあ・・・減給か・・・きついな。」

そんなことをぶつぶつ言いながら廊下を歩く。その足取りは見る

からに重い。

自業自得とはいえあまりにひどい罰がデュマの肩に伸しかかっていた。

しかも今からあのソニアの所へ行くとなれば肩の重みは倍增だ。自然と歩く速度も遅くなってしまう。

「はあ・・・泣きつ面に蜂、一難去つてまた一難つて感じだな。おれ」

デュマはおもむろに自嘲し、続いて溜め息を零した。

\*\*\*\*\*

仲間たちに無事を伝えたあと、デュマは遂に目的地——死地とも言う——に辿り着いてしまっていた。

息をひとつ吸って気持ちを落ち着ける。

心臓はこれから起るであろう事象に恐怖を感じ、早鐘のように鼓動している。

「行くのやめようかな？」

どうしてもそう考えてしまうのは、仕方のないことだった。

ソニア・オーウェンは傭兵団の数少ない女性パイロットで、普段はおとなしくもの静かで可愛らしいお嬢様だ。

しかし如何せん、操縦かんや怒りに触れると激情を奮い立たせ豹変する、かなり怖い人物である。

デュマとは幼少からの付き合いで、いわゆる幼馴染って奴でもあった。長い付き合いだからこそわかるが、デュマはソニアを怒らすとやばいことを身をもって体験しているのだ。

そしてほっとけばさらにまずいことになるのも知っている。

つまりどうやってもデュマはソニアに怒<sup>や</sup>られるのだ。

「よし。腹くくろう。もたもたしてもしょうがない」

デュマは覚悟を決めてソニアのいる扉の前に立つ。

ドアの隙間から殺気が溢れているのはあえて気にせず、やや現実逃避気味になりながら意を決しノックする。

「・・・誰？」

あきらかにとげのある声で返事が返って、思わず肩を竦める。

「デュ、デュマでございます。」

殺気に負けて敬語で返事をする。この時点でデュマはソニアに喰ってかかる戦意は失せている。

無論喰ってかかっても勝てはしないのだが・・・。

「・・・入りなさい」

先程よりも幾分か殺気が増した声でそう言われ、泣きそうになりながら、デュマはドアをくぐった。

——刹那、目の前からしゃもじが突如として現れる。

「うおっ！」

デュマはとつさに後方に避けてそれをかわした。

しかし間髪いれずもうひとつ飛来し、今度は避けきれずに額に改心の一撃。

「いつてー！・・・っておい！！やめろ、ソニア！！！！！！」

声を荒げて怒鳴るデュマ。

すると、止んでいたしゃもじが再び飛んできた。

「すいません、まじで勘弁してください。」

さつきとは打って変わり悲痛な声で懇願する。これ以上のしゃもじによる攻撃はいくらなんでも喰らいたくない。

「・・・ふん。」

その懇願が功を成し、しゃもじによる攻撃が停止した。

それを見計らって、デュマはソニアの前に移動する。

「今日は心配掛けてすまなかった。」

頭を深々とさげ、許しを懇願した。  
地面に額を擦り付けるのもありだったがそこまでは卑屈になれない、ということで普通に謝ったのだ。

しばしの沈黙が……デュマに恐怖を着々と蓄えさせる。  
怒気をはらんだ視線がデュマに突き刺さる。

怒鳴られるより無言の圧力のがよっぽど怖いということを、デュマは今、身を挺して体験していた。

敵に追い縋られるよりも団長の鉄拳制裁よりも、この幼馴染の方が断然恐しかった。

——何故怖いのか？

それは、デュマには判らない。いや判ろつとしないだけかもしれない。

だが知ってしまったえばソニアとの関係が変わるようでデュマは怖かった。もちろん未知なるものへの不安という意味だが……。

「顔をあげなさい」

いろいろ考えているうちにソニアが冷く言い放つ。

その様子はさながら氷の女王と言う感じである。室内の温度が1、2度低くデュマには感じられた。

恐る恐る顔をあげたデュマ。

「何か言う事はないの？」

「申し訳無かった。ほんつとくに申し訳無かった」

再び額を擦り付けて謝る。デュマも心配掛けたのは重々承知しているので誠意を込めてデュマは謝罪した。

「……じゃあお願い聞いてくれる？」

いつも通りの口調（？）に戻り、ソニアはデュマに言った。

「何？」

「……」

デュマが立ちあがったあと、しばしソニアは沈黙していた。

その後、デュマは胸にかすかな振動を感じ、それを確認した直後に硬直した。

それとは正に単純明白。

ソニアがデュマの胸に抱き付いているのだ。甘美な微香が鼻を突き、柔らかな四肢が体に触れる。

先ほどまで般若だと思っていた人物を、改めて女性と認識するにいたって簡単なことだった。

少しだけ無言の一時が流れると、微かな小声が胸元から聞こえる。

「心配した、心配した、心配した。」

そっとソニアを抱き締め、改めて謝罪を口にした。

何度謝ったのかはもう忘れてしまったが、それでも、誰よりも心配してくれた彼女にデュマは謝らずにはいられなかった。

「ごめんな。でも、次は大丈夫だ。もうあんなへまなんかしないから」

「……………約束？」

「ああ約束だ」

そう言うソニアは若干の名残惜しさを感じさせながら、デュマからそっと離れた。

顔の表情に照れはなくいつも通りに戻っている。

——デュマは耳まで真っ赤なのだが……………。

そしてその後、

「何故？」

ソニアが不意にデュマに問うた。

「何故とはどういう意味だ？」

意味が判らず問い返すデュマに、ソニアは溜息をついて同じ言葉を紡いだ。

「何故なかなか帰ってこなかったの？」

「ああ……………ちょっと気になることがあったんだ。」

そしてデュマはここまでの経緯を淡々と話し始めた。

## 第二話（後書き）

こんばんわ

新 あの花の向こうへ第二話です。

拙い文章ではありますが楽しんでもらえれば幸いです

### 第三話

今日出会った謎の飛行機の事をデユマは話だした。

「所属は<sup>だいてん</sup>大天の国、ちよつとみただけだから細かいことは解らない。確認したのは武装と形状くらいのもんだ。」

「・・・ふーん。興味深いわ。もし新しい戦闘機だったら、やっかいそうね。」

「ああ、得体の知れない分不安だしな。なにより俺たちのいるエルトルテスは、空軍がさっぱりだからな。戦争になれば制空権はあっさり向こうに渡っちまう。」

「そうね。腑甲斐ないわ。」

ソニアは苦々しげに言葉を吐く。

自慢にすらならないがエルトルテス空軍は超が付くほど弱いのだ。理由としては優秀なパイロットがいないのが大きい。もともと陸軍、海軍に力を入れて来たという歴史やなまじ実績があるためか優秀な若者は多くがそちらへ流れてしまっし、なにより優秀なパイロットがいても傭兵団がかっさらってしまうという実情もある。そういうわけで正規空軍は弱い。

「まあ、そうはいつでもいられないのが事実だ。俺達だけではどうしようもないからな」

「うん・・・まあ出来る範囲で調べておくわ」

「サンキュ、任せた」

そこで再び沈黙が訪れた。

「落ち着かない。居心地がものすごく悪い。」

「じゃ、じゃあ俺はこれで・・・」

そう言い残してソニアに背を向け、部屋からそそくさと出ようとした所で後ろから声が掛った。

「・・・次に心配掛けたら・・・」

その言葉を遮りデユマは、次はないから。と言って部屋を出て行

った。

次の日、朝、団長に呼ばれた。内容は昨日の敵機について。

「お前・・・昨日見た機体を覚えてるな？」

団長はおもむろに口を開いた。いつもより声が怖い気がするのはデュマの気の所為ではないだろう。

「まあ、一応。ていうか、何で団長がそのことを？」

「ソニアから聞いた。前々から噂にもなっていたんだがまさか本当とはな・・・お前が見た機体の名前は神電<sup>しんでん</sup>。大天の国で今作られている実験機だ。しかも、上昇性能、格闘性能、最高速度、すべての面で「アルト」で敵う機体はざんねんがない。」

デュマは愕然とした。「アルト」には、国中で最も優れた機体が集められている。単座機、複座機、偵察機、輸送艦。空に関するすべての事象に対応できるようになっている。しかしそれをもってすら敵わないということは、このエルトステスの国には打つ手がないことになる。

「そんな！！じゃあどうするんですか。近々戦いになるんでしょう？大天の国と・・・むざむざ負けろって言うんですか。」

「馬鹿やろう。誰が負けるか。いいか？神電はまだ実験機。そう量産されてははいはずだ。だったら、神電との戦闘だけ避ければそれで解決だ。」

「・・・そんな。俺たちに空の戦いで尻尾まいて逃げろって言うのかよ。」

デュマは許せなかった。大好きな空で負ける事。まして戦わず逃げるなんてプライドが許さなかった。

「じゃあ、お前は死ぬのか？戦っても絶対勝てない相手に。むざむざ死に行くのか？」

団長は低いこえで告げる。

「お前の言ってることは俺にだってわかる。空で負けんのは悔しいさ。だがな・・・死んだらそこで終わりなんだ。」

「・・・・・・」

「団長としてじゃなくお前にひとつ言ってやる。よく聞け。どんな惨めな引き際でも死ぬのよりはまし。これだけは覚えとけ。」

デユマはその言葉に返事ができなかった。言葉を理解することはたやすい。しかし受け入れられるかは別問題だった。

「話はそれだけだ。」

明日はお前とバークで偵察任務が入ってる。今日はのんびりしてろ。」

団長はそう言つとデユマの肩をたたき部屋から出て行った。デユマはしばらくその場に立ち尽くしていた。

### 第三話（後書き）

最近はいいい調子でアップできてますw

本当に君は受験生なのかって言われそうですけど

さて今回は敵の姿をちらつかせる話です

短いですがそこはご容赦ください

## 第四話

団長との話の翌日、デユマは偵察任務をするため飛空場へ来ていた。

「全然やる気でねえ……」

昨日の団長との会話が頭から離れない。昨日からそのことばかりがデユマの頭を巡っていた。

「死ぬよりまし……か。そうは言っても納得できないものは納得できないよな」

デユマだつてまだ若いのだから死ぬのは勘弁したい。しかし敵の前にして戦わずして逃げるなんて選択肢は、デユマのプライドが許さなかった。

——空では負けない。

デユマが傭兵団に入った時、自分の心に誓ったのだ。

だから今までただがむしやりに飛行機に乗って戦つて来た。被弾して危なかった時もありはしたが、敵を目前で尻込みして逃亡なんてのはしたことがない。

しかし今、目の前には太刀打ち出来無いほど強大な物が立ちほだかっている。

むざむざ戦えば墜とされるのは必至。だけど逃げるのは嫌だ。

そんな葛藤がデユマを苦しめていたのである。

「空でこんなんじゃまた墜とされちまうな」

苦笑まじりの声で呟く。空で余計な考え事は禁物。飛空士にとって一瞬の油断が命取りになることは常識だ。

——今は目の前に集中だ。

そう自分に言い聞かせる。

「っし。切り換える」

「何を切り換えるのかな？」

「ひゃうつー!!」

突如声を掛られ思わず奇声が出た。

デュマが勢い良く振り返るとそこには、憎たらしいほどのにやにやした表情を浮かべるバークが立っていた。

「おやおや随分可愛い声ですね」

その声には明らかにからかいの気色が入っている。

「ばっ、ばかやろう。今のはあれだ。猫が・・・はいはい」

言葉はバークの声に被せられて最後まで言わせてもらえない。

恨めしい顔でバークを睨む。睨まれた方は飄々《ひょうひょう》として明後日の方向を向いて口笛を吹いている。

デュマはそれ以上の追求を諦め、バークを置いて一人機体の方へ歩き出した。

「ちよつと！？ お兄さん、置いてくな」

それまた無視してさっさと機体に取り込む。

バークが後席に乗ったのを確認し、エンジンに火をいれる。かすかな唸りを上げて回りだすプロペラ。

「出発」

そう呟き、操縦桿を引いた。

ゆっくりとしかししっかりと機体が浮かび上がる。

今日は複座偵察機「エディオン」に乗ってエルトルテス領の端の

端にあるマルジン諸島あたりを見回るのがデュマ達の役目だった。

戦争が始まった訳ではないにしても油断ならない状況下の今、国境付近の偵察は相手への牽制も含めかなり重要な任になっている。

だがデュマ達にとってはせいぜい楽な空の遊覧程度でしかない・・・。

——はずだった。

この時、デュマはそれに気付くことが出来なかった。

#### 第四話（後書き）

こんにちわ 作者です。

最近暑いですね・・・

家にもだけでも疲れます。 皆さんは大丈夫でしょうか？

さて今回は短くなっております。

何故かは分かりませんW

次回はがんばります。

それでは今回も楽しんでいただければ幸いです。

## 第五話

「ふうつ。なんかいいなあ、今日の偵察は安穩としてて」

基地を出発してから一時間、バークが伝声管越しに呟いてきた。

「そうだな・・・でも、なんか嫌あな予感もすんだよな」

「なーに言ってるの？ ダイジヨブダイジヨブ。デュマはすぐ悪いほうに考えんだから。悪い癖だぜ？」

「そうだと良いけど・・・」

そんなやりとりをした矢先、チカツと前方が輝いた気がした。

そう——デュマの予感が的中した。

「おいデュマ！！　なんか来た、三時の方向！！！」

慌ててそっちの方向へ目を向ける。

その目線の先には、

「なっ・・・！？」

デュマは思わず絶句した。デュマの予想を上回って最悪の敵が来たのだ。

そう、敵はあの——神電。

大天の国が誇る、空の王である。

「まさか・・・うそだろ」

「おい！　何だっつてんだ、あれはなんだよデュマ！？」

バークが癩癪かんしゃくを零すように叫ぶ。その声には状況が掴めないという困惑の色が混じっていた。

しかしその問いに答えることが出来ない。

「あれは・・・神電。でも実験機なのに何故？」

テスト飛行にしても、もっと場所があるだろう・・・」

代わりにデュマの呆然とした声が機内に奇妙に響いた。

\*\*\*\*\*

デュマとバークが神電と出会い、そして戦闘が始まってから五分が経っていた。

実験機なのに何故というデュマの疑問は早々に解消されることになった。

あれはすでに実験機うんぬんのレベルではない。

もし仮にあれが大量生産・実戦配備されたならなら戦争が始まった瞬間、制空権は即座に向こうのものだろう。

それほどまでに圧倒的性能差。神電はまさにその名のとおり空戦の神、そう言うに相応しい機体だった。

——やばい。

デュマは内心焦っていた。機体の性能で何歩も劣っている上に、こちらに武装はないと来た。

避ける事しか出来ない状況はもはや絶望的、いやもう絶体絶命といったところだ。

背中を冷たい汗が伝い、最悪の状況が頭を掠める。

——このままじゃ墜やいねとされる。

「バークっ。何か方法はないかつ！？ このままじゃやられるぞ」

デュマは頭を振っていやな予感を振り払い、バークに向かって叫ぶ。

「せめて……せめて厚い雲があれば」  
バークのつぶやきが伝声管越しに聞こえる。

「雲……」

デュマはそれを聞いて辺りを見渡そうとしたが、背中に殺気を感じ慌てて機体を横滑りさせる。すんでのところで、神電から放たれた銃弾を回避した。

しかし安堵するまもなく、次の一射が容赦なくデュマ達を襲う。  
「やべえっ。」

デュマは機体の速度をあげ、左へと回避

——しようとしたが避けきれず神電から放たれた凶弾が風防を食い破りデュマへと襲い掛かった。

「がっ……!？」

一瞬なにが起きたかデュマには解らなかった。しかし次の瞬間激しい痛みがデュマを襲う。

「しまっ……た。被弾……した」

額から流れ出る血が視界を遮り、意識が遠のく。

幸い致命傷ではないが、傷は案外深く、とめどなく頭上から血があふれ出ている。

「デュマっ!!! しっかりしろ!!!」

遠いところからバークの声が聞こえる。出血が多いせいで、意識が判然としない。

「墜ちたら団長とソニアに殺されるぞ!!!」

バークが恐ろしい事を叫んだ。

——ここで落とされたら死んでからも一生恨まれる。

そう思ったデュマは混濁しだした意識を振り絞って、操縦かんを握った。

「バーク・・・少し揺れるが我慢しろ」

そう言つとデュマはエンジンを限界まで回す。しばし異様な音と同時に黒煙が上がりだ。

そしてそれがはつきりと見えたのを確認すると、エンジンを切つた。

当然の如く、プロペラは回転をやめ、機体は海へと墜落していくように見える。その瞬間デュマは再びエンジンに火を入れ、プロペラを思い切りまわす。

力強い咆哮と共に一気に加速して神電から距離を置く。

荒技というかなんというかなかなり無茶な技(?)である。

これ以上の深追いは躊躇われたのか、神電は追つてこなかった。

「デュマさん!? 何したの今!？」

「あれ・・・だ。墜落・・・」

デュマは答えようとしたが、上手く声にならなかった。

「バーク、操縦・・・代わつて。」

デュマは切れ切れになりながら声を掛ける。

「お、おう。任せろや。とりあえず着水してくれるか？」

幸いというか今日乗っているこのエディオン、フロートが付いており水上による離発着が可能なのだ。

かなり不安定ながらもなんとか着水し、そこでデュマは気を失つた。

薄れゆく意識のなか、デュマは減給とソニアによる折檻を覚悟したのは言うまでもない。

## 第五話（後書き）

こんばんわ

今回は第五話です。

正直苦手の戦闘シーンですので至らぬ所はあるかと思いますがご了承ください。

もしここはこうしたほうが良いなどのアドバイスがあればご指摘いただければ幸いです。

## 第六話

デユマが次に目を覚ました時、なぜかデユマは病院のベッドに寝ていた。腕からは輸血用の点滴が伸びている。それに体のあちこちが痛み、四肢が焼かれているような感覚に襲われる。

「俺．．．なんでここにいんだ？」

確か神電に追われて墜とされたような．．．」

と、そこでまた体にするどい痛みが走り思考を中断する。

「痛え．．．．．」

しばしデユマが痛みと格闘しているとノックが聞こえた。

「どうぞ」

デユマは扉に向かって声を掛ける。そこから顔のぞかせたのは、ソニアだった。微かに怒気を腹んでいる気がするのはあえて気にしないことにする。

「おう」

「具合はどう？」

「まずまずつてところだ。」

「そう．．．．でもまた心配させた．．．次はないとか言つて結局．．．．．」

その時デユマはソニアの背後に般若を見た。怒気なんて生優しいものじゃない。目にみえる明確な殺意。

「恐怖で震えが止まらない。」

「あの．．．ソニアさん？俺今怪我してっから、とりあえずその手

に持つてるしゃもじを置いてくれるかな？」

「・・・・・・・・・・」

「心配かけてすいませんでした、深く反省してます」

ソニアの殺気にビビリながら必死に平謝り。

「ここで謝っておかねば殺られる。」

デュマはこのときそう感じたと後にバークに語っている。

「ならいい・・・ほんとに心配した・・・団長たちも心配してた」

「そっか、ありがとな」

「別に・・・」

ところでデュマは思い出したようにソニアに声を掛けた。

「そっいえばバークは？」

あの後気を失っていたせいで友人がどうなっているのかデュマは知らないのだ。

「まあピンピンしてんだろっけどな。」

デュマはそれを口には出さず心の中で呟いた。

「ケロッとして仕事してる。」

「そっか、ならいいや。」

そこで会話が途切れ沈黙が訪れる。

しかし嫌な沈黙ではなかった。それどころかデュマは心地良さを感じていた。

それが何故だか気付くのはまだ先のお話。

「まだ痛むんでしょ？もうしばらく休んでれば？」

「ああ、でもあんまり休んでる訳にも行かないからな。俺どれくらい気絶してた？」

「一日くらいだろうかと高を括っていたのだがソニアが口にしたのは」。

「二日・・・」

デユマは絶句した。やられてから二日も気絶していたとは自分でも思いもよらなかった。

しかしこれでますます休んでいる訳にはいかなかった。二日も休んでおいて更に休息をもらったりしては居心地が悪い。デユマは痛むからだに喝をいれて立ち上がる。しかし立ち上がってすぐによろけてしまった。

「おっと・・・」

ソニアに抱き留められる。普通は逆な気がしないでもない。

「デユマ・・・無理しないほうがいい。そんな調子じゃ何もできないでしょ・・・」

「いや・・・少し痛むけど大丈夫だ。心配ない」

「デユマがそう言うならいい・・・私は先に仕事に戻る。一応団長のところに行ってから仕事に行つて・・・」

ソニアは呆れたというより勝手にすればというように言つてドアを開けて出て行くとする。その去り際の背中に向けてデユマは、礼の言葉を投げかけた。ソニアはそれに短く手を振つてドアを閉めた。

「さて・・・着替えて仕事行きますか」

ソニアが出て行つて誰もいない部屋で独り呟き団服に袖を通す。攻撃された時に血と汗で汚れ、ガラスで破れていた所はきれいに洗われて縫い直してあった。着た瞬間に微かに石鹸のにおいがする。おそらくソニアが洗つておいてくれたのであるうそれに身を包み、デユマは団長室へと向かった。

団長室へ着くとドアの前にはバークが立っていた。デユマに気づいて軽く手をあげる。

「ようっ！！相棒。調子はどうだい？」

バークは軽い調子で声をかける。

「おかげさまでずいぶん良くなったよ、ありがとう」

デユマは軽く頭を下げバークのほうを見た。

「そうかそうか、なら良かった！！あの後お前気絶したから死んだのかと思って、焦ったぜ」

相変わらずの口調でバークはデュマの肩を思い切り叩く。デュマは声にならない悲鳴をあげ肩を抑えた。

「ピンポイントで傷口に・・・。」

「つと悪い！！まだ痛むのか？」

バークは申し訳なさそうにデュマの顔を覗き込む。

「いや・・・大丈夫だ」

デュマはそう言いながら立ちあがった。

「ほんとに悪かった！！！」

「いや、本当に大丈夫だ。それよりバーク・・・仕事は？」

それを聞いた瞬間バークの顔から血の気が引いた。

「・・・・・・忘れてた」

「うん・・・そうか、今から行けばいいんじゃないか？」

デュマがその声を掛けた瞬間にはバークは廊下を疾走。瞬く間に角へと吸い込まれていった。

そんなバークを見送った後、デュマは気をとりなおして団長室のドアを叩いた。

「開いてるぞ」

扉の奥からおっかない声が聞こえてくる。

「ちびりそうだ。」

デュマは恐々とノブへと手を掛ける。開ける前に一つ深呼吸をして団長は怖くないと言い聞かせた。

「失礼します」

「おう・・・ってデュマ、お前なんでここにいる？お前はもうしばらく安静にしかないといけないはずだろ」

「いや、こんなにしょっちゅう仕事休んでられませんよ。いても経

つてもいられずに出てきました」

「馬鹿かお前は！！！」

響きわたる雷、もとい団長の怒声。

「病人も怪我人も体を治すのが先決だ。中途半端で仕事されても迷惑なんだよ」

デュマは最もな事を言われ返す言葉もない。しかしこのまま下がるわけにも行かないのでなおも食い下がる。

「でもっ！！！！みんな働いてるのに俺だけのうのうとベッドで寝てるなんてできません」

「るせえ！！！！さつきも言ったが怪我人は寝てろ。これ以上文句垂れんならこつから追い出すぞ」

「またも言い返せない。今回は言い返せないと言うより団長が怖くて口が開かないのだ。悔しさと情けなさで拳を握り締めた。」

「分かったならとつと病室戻れ」

「・・・・・・はい」

今にも消え入りそうな声で返事をしてデュマは団長に背を向ける。ドアノブに手を掛けたところで団長から声がかかる。

「今はしっかり休んどけ。近々でかい仕事が来る。そうなたら怪我しても休みなんてないからな」

心なしか優しい声で且つ重々しい声に押されつつデュマは外へ出た。

## 第六話（後書き）

こんばんわ。

最近受験がつらくて泣きそうな作者です

夏も暑くてしにそうです。

では今回もお楽しみください

## 第七話

病室に帰った瞬間、デュマは医者に殴られた。理由はもちろん病室からの脱走。そしてこつてり小一時間お説教。

それからようやく解放され自分のベッドに戻ったときすでに時間はお昼を回っていた。もちろんお説教のせいで昼飯はない。

「腹減った……」

しかし何か食べようにも何もない。病院の白いベッドの上でデュマは呻いた。二日も気絶していたのだから空腹なのは当然だ。

「あゝ空腹で目が回ってきた、空腹で死ぬとか勘弁してくれよ」

「何を一人でぶつぶつ言ってるの？」

いつのまにやらソニアが横へと立っている。

「何か恵んでくださいっ」

即座に地面に頭をこすりつけながら懇願した。プライドもくそもないが今は餓死の回避が先決らしい。

その時、ソニアが不敵に笑ったのにデュマは気付かなかった。

「じゃあ……1回転してワンとないてもらおうかな？」

——今おかしい言葉が聞こえたような……

「はい？」

「一回転してワンと鳴きなさい」

「……お前そんなキャラだっけ」

デュマは頭を掻きながらしばし考える。

——目の前にいるのは確かにソニアのはず。しかしこんなドSな性格ではなかったような気がする。

少し考えた末デユマが取った行動は・・・一回転してワンと鳴く事。

しかし恥を忍んでやったそれを見てソニアは一言。

「デユマ・・・頭大丈夫？」

「お前がやれって言ったんだろ～～～～！！！」

デユマの絶叫が病院内を駆け巡った。

しかしソニアは、

「・・・そうだっけ？」

と、小首を傾げるだけ。しかし可愛い仕草とは裏腹に顔には小悪魔な雰囲気that浮かんでいたのをデユマは見逃さなかった。

そんなコントの後デユマは改めてソニアをお願いをした。

「頼むから何か恵んでください」

しょうがないなと言うふうにはソニアはポケットを探り、何かを差し出した。

「ん・・・これあげる」

ソニアの細くて白い手に握られていたのは黒い塊だった。禍々しいと形容するに相応しい代物だ。だが、ソニアは決して料理が駄目ではないのをデユマは知っている。だとすれば今回のがたまたま失敗したとも考えられる。

そしてデユマは頭を抱え悩んだ。

そしてその末一つの言葉を搾り出した。

「・・・炭？」

呟いた瞬間、しゃもじの嵐。こうなることは予想できたが言わずには居られなかったのだ。

「冗談言うならあげない・・・」

ものすごく不機嫌そうにソニアに言われた。

「いや・・・冗談ではなかったんだけど・・・」

デュマは聞こえないように呟いた。

「食べないの？」

ソニアは男ならだれでも墜ちる必殺技、上目使いでデュマを見ている。

デュマの心の砦が数秒で崩れたのはある意味必然だった。

そしてその後それで激しく後悔することになるのもまた必然だったのかもしれない。

デュマが次に目を覚ました時、なぜかデュマはまた病院のベッドに寝ていた。

ひどく頭が痛み満足に体を起こせない。

「デュマ・・・大丈夫？」

「あ、ああ。なんとか・・・それより俺は何故ここにいまだに居るんだ？」

ソニアに何か食べ物をもらったような気がするが記憶が判然としならしい。

「・・・私のおちやめで作ったクッキーを食べてまた倒れたから」

「お前のせいだよ」。

「というか俺の心配をするのであれば最初からいたずらしないで欲しいんだが・・・」

「考えとく」

「そこは譲いておくところだと思うぞ」

「・・・デュマ、ごめんね？」

少し甘えた声と上目使い攻撃。

デュマは顔を背けた。顔が微かに赤らんでいるのはきつと日の光が当たっているから。

そこで病院内の放送が流れた。面接時間の終了を告げるものだ。

「ん、そろそろ終わりだな。わざわざありがとうな。」

デュマは感謝を述べる。もちろん顔は背けたままで。

「いい。気にしなくても……じゃあまたね」

ソニアはそう言っているとデュマが声を掛けるまもなく病室から出て行った。ソニアの声に微笑が混っていた気がした。

## 第七話（後書き）

皆さんこんばんわ

今回もまた僕の拙い話を読んでいただきありがとうございます。

またここはこうしたら良いなどというご指摘がありましたら感想  
をお願いします

では

## お知らせ

皆さん、こんばんわ 作者の大上青です。

突然で申し訳ないのですが、暫く連載の方をお休みさせていただきたいと思います。

作者としてもこんな中途半端で止めるのは心苦しいのですが、人生の岐路と言う名の大学受験がもう間近に迫っており心身共に余裕がなくなってきたので休載しようと思いました。

再開の方は大学が決まり次第再開したいと思います。

早くて十二月下旬、遅くて五月つてところかなと予想しております。

本当にすいませんでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8730u/>

---

新 あの空の向こうへ

2011年9月4日03時38分発行